

た。4個体のものはナガウニ棘であったが、1個体のものはシラヒゲウニ稚ウニの棘に類似していた。他の魚類では、ウニ類を摂餌していたものはなかった。

4. 関連調査

シラヒゲウニ稚ウニの出現状況を把握するための調査を、前年度から引き続き実施した。

2001年4月の調査では、殆どが殻径70mm以上の1999年級群であった。40mm台のウニも僅かに出現したが、これは2000年級群の早期に発生した群である。5月には5~30mmの2000年級群が出現し、6月にはそれらは20~55mmとなった。30mm以下の稚ウニの出現状況は、前年とほぼ同様5月~6月に最も多かった。2000年級群は7月には成長の早い群が70mmに達し、1999年級群と殻径組成がオーバーラップするようになった。8月以降は、1999年級群の多くが漁獲されたため殆どが2000年級群となった。2000年級群は夏以降、成長が停滞し12月の殻径は50~85mmであった。

今帰仁村地先のウニ漁場周辺海域に15定点を設けて、ウニ漁期前の5月とウニ漁期後の9月の2回、シラヒゲウニ資源量調査を実施した。5月の調査では、シラヒゲウニ生息密度は0~0.30個/m²で、平均密度は0.052個/m²であった。推定資源量は、204,000個であった。9月の調査では、生息密度は0~0.29個/m²、平均密度は0.049個/m²で、推定資源量は163,000個であった。漁期前の5月には殻径65mm以上の1999年級群が97%を占め、40mm以下の2000年級群は3%だけであった。9月には2000年級群が成長して資源に加入し、1999年級群が漁獲されたため構成比は1999年級群が5%、2000年級群が95%となった。

実入り調査と漁協の取扱量から今帰仁漁協のシラヒゲウニ漁獲個数を推定した。シラヒゲウニの生殖腺重量は、各回の調査ともサンプルによる差が大きく、10~25g程度と2倍以上の差がみられた。平均値は8月14日の13.75gが最低で、7月27日の16.56gが最高であった。全期間の平均値は14.97gであった。2001年の今帰仁漁協のシラヒゲウニ漁獲個数は119,000個と推定された。1996年以降では、最も多い漁獲個数であった。他漁協の漁獲も考慮した、調査海域での2001年の総漁獲個数は15万個程度と推定された。